

なぜ若者の参画なのか

若者が参画することで、
地域社会が元気になり、
健やかに子どもが育つ

平成 16 年度神奈川県青少年指導者養成協議会専門部会では、子ども・若者が主体的に参画するための活動事例集「子どもと大人の参画関係」を発行しました。この事例集は、地域において、子ども・若者が地域活動に主体的に参画するためには、大人がどのような関わりを持つべきなのかを考えてもらうためのものでした。子ども・若者と関わる大人に意識改革を求めたものです。

そして平成 17 年度にこの「子ども・若者が主体的に参画するための活動プログラム集」を作成し、多くの人に読んでいただきたいと考えています。その中でも特に読んでいただきたいのは、子ども・若者に関わる大人・若者です。現在地域で子ども・若者と関わっていて、活動をする上で課題を抱えている方の中に、例えば中高生をどのように参画させればいいのかなどで、悩んでいる方たちもいらっしゃるでしょう。あるいは現在活動をしていないが、地域で若者と何かやってみようと考えている方もいらっしゃるでしょう。そういう方々にぜひお読みいただきたいと考えています。

しかしこの はどちらかというと、大人に読んでいただきたいものです。地域、子ども・若者の現状を理解していただき、大人としてどのように子ども・若者と関わっていけばよいのかを考えていただきたいからです。地域社会のあり方については理想論と思われるかもしれませんが、あるいはそんなことを言っても無理だろうと言われるかもしれません。しかし誰かが、どこかで始めなければ、このままでは子どもが健やかに育つための地域社会が存在しなくなってしまうかもしれません。

すでに地域で活動しているあるいはこれから何かをしてみたいと思っている若者にも読んでいただきたいのですが、特に中高生はこの は読み飛ばしてもかまいません。以降を参考にいただき、まずはできることから始め、そして行動してもらいたいのです。失敗を恐れずに挑戦してほしいのです。体験することで学べるものがたくさんあるはずですよ。

なぜ若者の参画なのか

バーチャル(仮想的)空間の中で～現代社会の中で「子ども・若者は」「親子・家族は」「地域は」リアル(現実的)でない人々

自分の周囲の人たちが気にならない人が多いようです。例えば電車の中の光景を思い浮かべてください。携帯電話で話している人、大声で話す高校生、手鏡を出して化粧を始める若い女性、自分の周囲にいる人たちがリアルな存在ではなくなっています。映画館のスクリーンの中の人物と同じ感覚なのではないでしょうか。バーチャルな存在となっています。

「人前で化粧をするのはみっともないよ」と年配の男性に声をかけられた女子高生は、何が起きたかわからないといった表情をしたということを聞いたことがあります。まさかスクリーンに映っている人物が自分に声をかけてくるとは誰も思わないでしょうから。

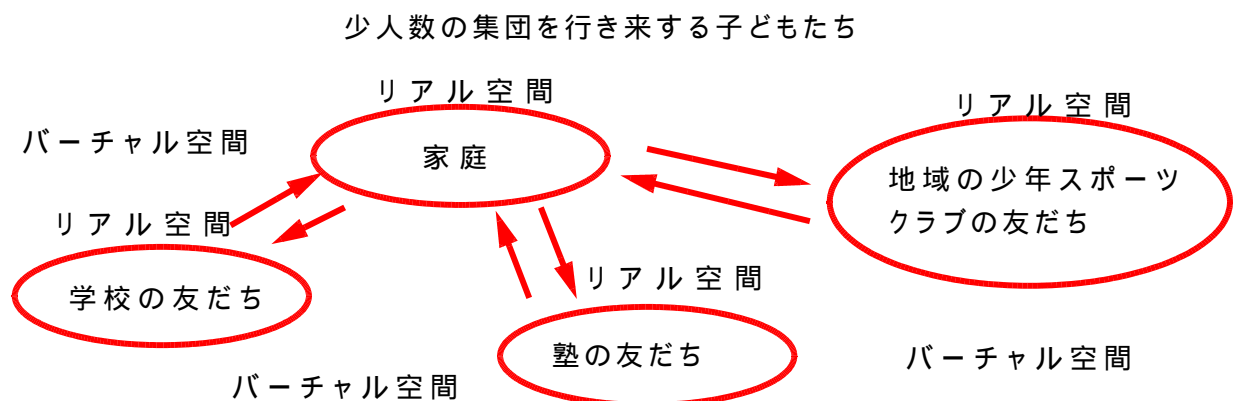
しかしこれらの現象は、電車や都会の雑踏などだけの話ではありません。自分の住んでいる近所でも同じことが言えないでしょうか。道で出会っても挨拶をしません。挨拶をするとびっくりした顔をされてしまいます。まさに看板に描かれた人物が、突然自分に挨拶してきたようなものです。

もし隣に住んでいる人と挨拶はおるか、顔を合わせたことすらないという人がいたら、その人にとっては家を一步出たら、そこに広がるのはバーチャル空間と言えるのかもしれませんが。しかしこれは今の時代そう珍しいことではないでしょう。隣人との関係性は希薄であり、些細なことでトラブルが生じます。それはお互いの気遣いが欠けているからです。人と人のつきあいがそこにはありません。

リアル(現実的)な人間関係

学校または職場に行けば、そこにはリアルな存在としての友人あるいは同僚がいます。そこはお互いに気を遣い、そして葛藤のあるリアルな空間です。しかし今の子ども・若者にとって、その空間は小さなものになっています。友達グループの小集団化が進み、クラスがいくつかのグループに分かれるどころか、2、3人の小集団ばかりになっている場合があります。お互いのグループの関係性は希薄になりがちであり、ある日気がつくとクラスが電車や都会の雑踏と同じ状態になっているかもしれません。これではいじめに遭っているクラスメートがいても見て見ぬふりをしてしまい、電車の中で酔っぱらいに絡まれている若い女性を見ても、「電車男」のようにそう簡単には助けられないのと同じです。このことは現代の子どもたちがクラス全体であるいは集団で何かをするのが苦手だということにつながります。帰属感や一体感がなく、協力して何かに当たるといことに積極的になれないのです。

そして職場でも同じことが言えるのかもしれませんが。少人数の仲の良い同僚はいても、職場全体で親睦会をやってもなかなか人が集まりません。また職場の行事に参加するという人が少なくなっているところもあります。我々はそのような小集団による狭い空間をいくつか行き来しながら生活しているのかもしれませんが。その空間と空間を行き来する間は、スクリーンの中の風景がただ流れているだけです。



子ども・若者の現状

さて子どもたちはこのような現代にあってどのように育っているのでしょうか。小学生が友達と遊ぶとき、お互いに電話をしあって都合を聞きます。そして公園に集まってくるのは2、3人ということがよくあります。しかもベンチに座ってそれぞれが携帯用ゲーム機に興じている場面をよく見ます。あるいは2人で対戦型のカードゲームをしています。それでもたまに4、5人で鬼ごっこなどをしていることもあります。塾や習い事などで子どもたちが忙しい現状を現しています。

「外遊びの集団の規模・構成・内容」について、公園や校庭で遊んでいるそれらの子を実際に観測したところ、集団の規模としては2人で遊んでいる場合が最も多く26.5%、続いて1人の20.7%、3人の15.5%の順であった。年齢構成では、同年齢で遊ぶ場合が主で、昔のような異年齢での遊び集団は全体の8.1%に過ぎない。（『子どもの遊び実態調査』平成14年福岡県実施、対象：小中学生）

塾やお稽古等への参加状況をたずねたところ、児童については、6年生が一番参加率が高く(69%)、次いで4年生(65%)、2年生(55%)となった。塾やお稽古等に通っていると答えた者に対して、その日数をたずねたところ、6年生については「2日」が20%と最も多く、2年生、4年生は「1日」(2年生27%、4年生25%)が多かった。「1日」の参加をみると学年が進むにつれて値が低くなっていて、6年生は19%である。それに対して「2日」、「3日」、「4日」、「5日以上」については、学年が進むにつれてすべての値が高くなっている。（『子どもの遊びに関する調査』平成15年神奈川県教育委員会実施、対象：小学2、4、6年生）

子どもたちには社会性が身につけていない、人間関係づくりがうまくいわずと言われます。対人関係が未発達であり、コミュニケーション能力に乏しく、相手が考えていることを理解することがあまり上手でないとされます。対人関係に必要な「挨拶をする」「人の話を聞く」「人に話をする」という基本的なスキル(技能)が身に付いていないだけでなく、「相手の表情から(言葉には表れていない)気持ちを読む」「言葉の抑揚や言葉以外の手段で、感情を表したり、読み取ったりする」といったことも得意ではありません。さらに子どもたちの「幼児性の持続」「耐性の低さ」「共感性・自尊感情の乏しさ」なども言われます。

若者の中には、社会性があっても、上手に断る能力、選択する力や自己決定能力に欠けていて、いろいろな誘惑に勝てなかったり、その場の雰囲気流されてしまうことがあります。

子ども・若者が関わっている問題行動について、新聞やテレビ等のマスコミでよく取り上げられます。しかしそれは一部の子ども・若者によるものではなく、どの子ども・若者の延長線上にもある現象です。

このような現実があって、それを大人が「今の子どもは理解できない」とばかりは言ってられません。集団の中でもまれることがあまりなく、現実社会で多くの人との関わりを持たずに育った結果です。言わば社会性を身につけるための訓練としての実体験を積んでこなかった結果です。そういった状況になってしまっているのは、大人にも責任があるでしょう。

親子・家族関係の現状(「子ども・若者の現状」の原因として)

子ども・若者の現状があり、その原因として、最も考えられるのは親子関係・家族関係の希薄さがあります。例えばテレビを一緒に見るという家庭が減ってきているのではないのでしょうか。食事時間もばらばらであり、お互いに話をする時間が持たないという家庭もあるでしょう。テレビを一緒に見るということは、それぞれ感じたことを互いに話し合う材料を提供してくれます。また一緒に食事することで、その日にあった出来事について、話すこともできるでしょう。その結果共感することや反発することもあるでしょう。家族で共通の話題で話をするということは、お互いの感情を受容したり、ぶつけ合ういい機会だと思います。

また親が寛大になりすぎていることもあります。常識がずれてきていて、社会的責任を意識できない親がいます。つまり子どもを叱るべきときに叱らず、親として謝罪したり責任をとるべきところでとらない親が増えていきます。

地域社会の現状

本来の地域社会あるいはコミュニティとは、お互いに助け合ったり、協力し合うという関係性を維持しながら、自分たちが住んでいるところを住みやすくしようとする集団のことで、それに対して地域とは、「単なる区切られた土地」「土地の区域」「地形が隣接している、同じ性質をもっているなどの理由からひとまとめにされる土地」などを現しているに過ぎません。地域で暮らしている住民同士の関係性の如何によって、本来の地域社会が存在するかどうかということになります。住民同士の関係性が希薄化しているところが多くなってきて、地域社会が本来の地域社会ではなくなっています。

全国で、治安の乱れ・子どもの安全確保・3R (Reduce リデュース(ごみの減量)・Reuse リユース(再利用)・Recycle リサイクル(再資源化))など、多岐にわたる問題が取りざたされています。個々の家庭だけでは解決できない問題がたくさん出てきています。

運動会などの地域行事があっても、住民があまり参加しないようなところも多くなっています。それは従来型の地域行事を続けていても、関係が希薄になってしまった今、皆で行事を盛り上げようという気概が失われてしまったということです。このように本来の地域社会が存在しなくなってしまったところでは、子ども・若者が健やかに育つのは難しいでしょう。

子ども・若者にとって、地域は決して居心地の良いところではなくなっているのではないのでしょうか。小学生の遊び場は少なくなっていて、また中高生の居場所はなかなかありません。中高生になれば、数人でたむろしているだけで、煙たがられたり、何か悪いことでもするのではないかという目で見られたりします。おのずと地域から離れて、自分という存在が匿名性を帯びるバーチャル空間である街へ出かけていくことになります。そこにはいろいろ誘惑が待っています。またあまり外に出ないタイプの子どもの若者は、家庭の中の自室にこもりがちになります。本当に狭い現実の空間の中で、インターネットというバーチャルな世界とつながっています。そしてそこにもたくさんの誘惑があり、時には犯罪に巻き込まれることもあります。

「住んでいる地域は元気があると思うか」という質問に対して、元気があると答えたのは37.5%、元気がないと答えたのは43.7%だった。「住んでいる地域に元気がない理由は？」(複数回答可)は、就職する機会や職場選択の余地がないが22.9%、祭りや子ども会など地域の活動を熱心にやる人がいないが20.3%あった。(『地域再生に関する特別世論調査』平成17年6月内閣府大臣官房政府広報室の世論調査、対象：全国20歳以上)

「地域等の活動への参加」という質問に対して、「地域のお祭り」が56.4%で最も多く、次いで、「地域の清掃や防災などの活動」(48.9%)、「地域のスポーツやレクリエーションの大会」(44.9%)、「募金、献血」(27.6%)、「地域の子どもの指導や世話」(23.3%)、「公民館・児童館などの講座や催し」(20.7%)などの順となっているという回答結果であった。(『第2回青少年の生活と意識に関する基本調査』平成12年4月内閣府実施、対象：9~23歳)

地域社会のあるべき姿

地域社会の再生

まずは隣近所に暮らしている人たちと普通に挨拶をし、会話ができる関係が必要です。そこからお互い居心地が良くなるように、少しずつ気遣いながら生活するようになっていくことが大事です。困ったときには互いに声をかけあい、悩みも相談できるようになっていくことが望ましいでしょう。そうやって地域に暮らしている住民たちの関係性を高めていくことが、地域社会を再生するきっかけとなります。

しかし口で言うのは簡単でも、実際には大変なことです。具体的にはどうすればよいのでしょうか。地域住民の共通の話題が必要になってきます。それをどのように創出していくのかについて、異世代の住民が参加できる行事を利用するという方法があります。もちろん従来通りの行事ではなく、魅力があって皆が楽しく参加できるようなものを考えなければなりません。そのために子ども・若者が力を発揮してほしいと思います。

子ども・若者はどう育っていくべきか

子ども・若者には現実社会の中でできるだけ多くの人と関わるといふ実体験を積むことが必要です。それも反面教師としての大人も含めて多くの人と関わりながら、育つべきなのです。現代の子どもは、親、教師、塾の先生、スポーツコーチなどの子どもに向かって教え込むタイプの人たちとの関わりが多く、地域社会の大人との関わりは少なくなっています。常に評価されている状態にありますので、非常にストレスがたまっています。また、これでは子どもも息苦しいでしょう。また地域によってはいろいろな仕事をしている大人が身近にいないところもありますので、「働く」ということを子どものときに意識できません。そして自分が大人になるためのモデル選びにも苦労します。

人と関わりを持っていく中で、自分の思い通りにならないことがたくさん出てきます。そのようなときには、相手に説明・説得する方法を考えなければなりません。自己主張しているだけではうまくいかず、相手の考えを受け入れ尊重しなければならぬことも少しずつわかってきます。またやっつけはいけないことや自分が嫌なことをどのように断ればよいのかも体験していかなければ身につけません。体験したことが糧になり、社会性が身につく、コミュニケーション能力が高まり、対人関係を円滑にすることができるようになっていきます。周囲の人との関係ができてくれば、バーチャルが徐々にリアルに変わっていきます。

子ども・若者は、地域社会の中で異世代の人たちと関係性を持つことで、健やかに育っていきます。

子ども・若者は何を望んでいるのか

普段の生活で子どもたちは何を望んでいるのでしょうか。子どもたちは家でテレビゲームをしたり、テレビを見たりして過ごす時間が多いのが現状です。しかし子どもたちはテレビゲームなどの遊びだけを望んでいるのでしょうか。そうではないと思います。子どもたちが、学校から帰った後に特に約束もせずに集うことができ、安心して遊べる場所が近所にあつて、そこへ行けば誰かが必ずいるような環境があれば、もっと外遊びをするでしょう。しかし実際には遊び場は少なく、子どもたちは忙しいのが現実です。

小学生では「自分の部屋にいるのが好き」と答えているのは 61.4 % であり、「外へ行くのは面倒くさいと思っている」のは 22.5 % であるが、「地域に遊び場が少ない」と思っているのは 49.4 % と半数近くになっている。（「モノグラフ 小学生ナウVOL.21-3 子どもの放課後」ベネッセ教育総研,2002、調査対象：東京・神奈川・千葉の公立小学校4～6年生）

上記結果はもっと遊び場があれば外で遊びたいと考えている子どもが潜在的に存在することを表しているのではないのでしょうか。（神奈川県青少年指導者養成協議会専門部会）

現代の子どもたちは大勢で遊ぶときにスポーツ的なことが多く、スポーツ以外の昔遊び（陣取り、鬼ごっこ、缶蹴り、だるまさんが転んだ、馬跳びなど）をあまりしていません。広い遊び場と大勢の子どもたちがいても、最初は何をやっていいかわかりません。しかし制約の少ない遊び場さえあれば、子どもたちは自然発生的に遊びを発明するものです。

中高生になると、飲食しながら友だちと気兼ねなく話をして過ごせる場所がほしくなります。またバスケットボールなどができるスポーツ施設、スケートボードができるハーフパイプを備えた施設、音楽演奏ができるスタジオなどを無料であるいは安く借りたいというニーズも出てきます。家庭や学校以外の居場所が必要になってきます。

子ども・若者の望むことをどう解決していくのか

遊び場・居場所づくりについて、行政の取り組みは現状では十分とは言えません。NPO がそのようなことに

関わってほしいところですが、それもまだまだ進んでいません。スポーツ施設やスタジオを備えた「ゆう杉並」(杉並区立児童青少年センター)のような立派な施設を作ることは、今後はなかなか難しいことです。

そういった現状の中で、地域社会の住民は何をすればよいのでしょうか。まず地域社会で暮らす子ども・若者が本当に望んでいることは何なのかということに、大人が耳を傾けるべきです。大人は彼らの言い分を聞くことから始めて、それらを引き受けるという覚悟を持ち、支援する方法を考えてほしいと思います。そうして地域社会の子ども・若者・大人と一緒に考え、汗を流すことでできることから解決してほしいと思います。

「住んでいる地域の大人たちとの共同行動」という質問に対して、大人たちと一緒に何かができることが「よくある」と「ときどきある」を合わせた、共同行動の経験のある者は小学4～6年生(よくある6.5% + ときどき45.3%)でほぼ半数となっている。中学生以上になると、大人たちと行動を共にしたことがある者は1～2割程度となり、「あまりない」もしくは「まったくない」という者が多数を占めるという回答結果になっている。また「大人たちとの共同行動の希望の有無」という質問に対して、「ぜひ一緒にやりたい」という者は、小学4～6年生では2割弱(17.7%)となっており、「時々ならやりたい」(54.8%)という者を合わせると、7割以上の者が共同行動の希望を持っている。中学生以上になると、共同行動を希望する者は5割前後となるという回答結果になっている。

「地域等の活動への参加」という質問に対して、小学4年生～中学3年生の参加状況は、小学校4～6年生と中学生では、「近所のお祭り」(小学4～6年生72.9%、中学生56.9%)、「子ども会や町内会の運動会、クリスマス会など」(同52.8%、16.3%)、「道路や公園などのそうじ、町内の避難訓練など」(同20.1%、11.8%)などが上位に挙げられているが、いずれも中学生より小学4～6年生の参加率が高くなっている。「まったく参加していない」者は、小学4～6年生が8.6%、中学生が22.9%である。前回調査と比較すると、いずれの活動も前回調査より参加率が低くなっている。また15～24歳の参加状況はいずれの年齢層でも「地域のお祭り」(15～17歳36.3%、18～21歳24.7%、22～24歳21.7%)への参加率が最も高くなっているが、若年齢層ほど高くなる傾向がある。「まったく参加していない」者は5割前後である。(『第2回青少年の生活と意識に関する基本調査』平成12年4月内閣府実施、対象:9～23歳)

上記結果から、子ども・若者は地域の大人と一緒に何かをしたいという希望を持っているが、機会があまりないあるいは参加したくなるような魅力のあるものがないと考えられるのではないのでしょうか。(神奈川県青少年指導者養成協議会専門部会)

若者が地域活動に関わる

子ども・若者が健やかに育つためには、地域社会の再生が必要です。そのために若者がその特性を生かし力を発揮し、地域行事を盛り上げてほしいと思います。以下に若者が子ども活動の支援をすることによって、子ども・若者が成長するという点について述べます。

子ども活動の現状

ここで言う『子ども活動』とは、日常的な自然発生的遊びから、子ども会活動や子どもに関わるイベントまで含みます。例えば子ども会活動では、役員の任期は1年間であり、初めて役員になった大人は何をしてよいかかわからず、前年度踏襲型の活動になりがちです。それも子ども会の会費を使ったツアータイプ、つまりテーマパークへ連れて行くようなものが多くなります。あるいは子ども祭りを行う場合がありますが、子どもにとって魅力がないものになっていることがあります。それはなぜか。例えば御神輿を担いで近所を練り歩くにしても、なぜ御神輿をかついで練り歩くのかについて説明がないからです。小学校高学年になると参加が少なくなり、集まってもモチベーションが非常に低いので担ぐ子どもが少ないということになります。募金活動にしても、集まった募金の使い道

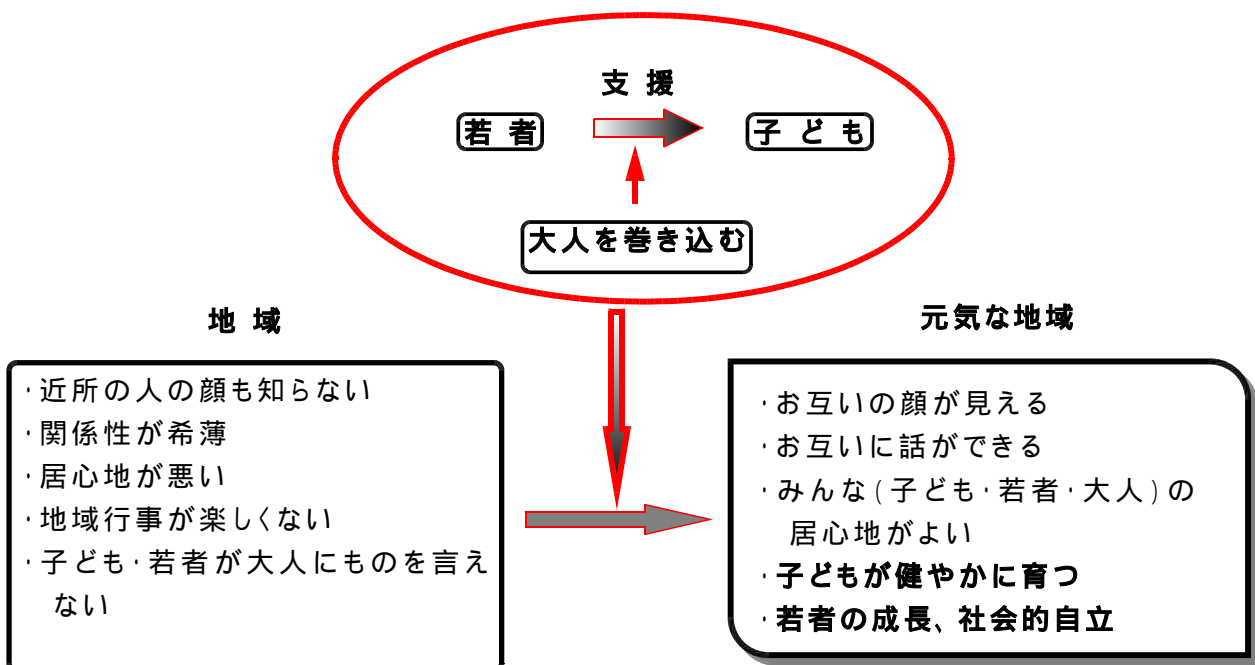
を説明しているのでしょうか。自分がやっていることの意義や効果を知ってやるのとそうでないのとでは、子どもの取り組み方や子どもへの効果が違ってきます。

しかし役員の人たちは、忙しい中でなかなか子どもの成長を待つような活動を立ち上げるのは難しいようです。中にはいいアイデアを持っている人がいても協力してくれる人がいないと実現するには二の足を踏んでしまうことがあります。

若者による子ども活動の支援の意義

このような子ども活動の現状に対して、もし中高生を中心とした地域に住んでいる若者が活動に参画するようになれば、活動に活気が出てきます。中高生が地域活動に参加する形態としては、子ども会行事へジュニアリーダーの参加があります。従来、子ども会からジュニアリーダーズクラブに依頼があるのは、新入生歓迎会、夏のキャンプ、クリスマス会、卒業生のお別れ会などでのゲーム指導がほとんどです。指導と言ってもレクリエーションゲームをリードすることです。子どもを指導して子どもがゲームをリードすることはほとんどありません。これでは、子どもとの関係は一過性のものとなってしまう、若者が地域活動に本当の意味で参画することにはなりません。子どもたちと日常的に関わりを持つことが重要です。

子どもの参画する魅力ある子ども活動



それではどのような参画の仕方があるのでしょうか。例えば土日などに児童館に出かけて行って、子どもと遊ぶということを続けてみてはどうでしょう。やがて人間関係が自然と生まれ、そこにはお兄さん、お姉さんとしての役割が生じます。遊び相手になるだけでなく、子どもたちがやりたいことが何なのかを自然と聞く役にもなります。そんな中から子どもがやってみたいことを実現させる手助けをしてみたらどうでしょうか。例えば「秘密基地づくりがしたい」という子どもからの要望が出たとします。しかし場所がない、それではどうすればよいのでしょうか。児童館付属の公園ではどうか。それを実現させるためには、どんなことをクリアしていかなければならないのかを子どもと一緒に考えるスタイルが必要です。若者が先に答えを出してはいけません。なかなか忍耐のいることですが、子どもの意見・考えが出てくるまで待つという姿勢が大切です。

このようなことは大人にはなかなかできません。大人は子どもより豊富な経験があり、その枠の中でものを考えてしまいがちです。その枠の外にある子どもの意見を素直に聞けない大人が多いようです。そして自分の経験の中でうまくいった例を持ち出して、子どもに聞かせようとしています。そういうことが繰り返されると、子どもはどうせ聞いてもらえないと思って、大人に話をしなくなります。また大人は子どもが伝えたい気持ちを聞き逃すことがあります。

その点年齢に近い若者には子どもに近い感性が残っていて、子どもたちの本音をすくい取る目の細かい網を持っています。

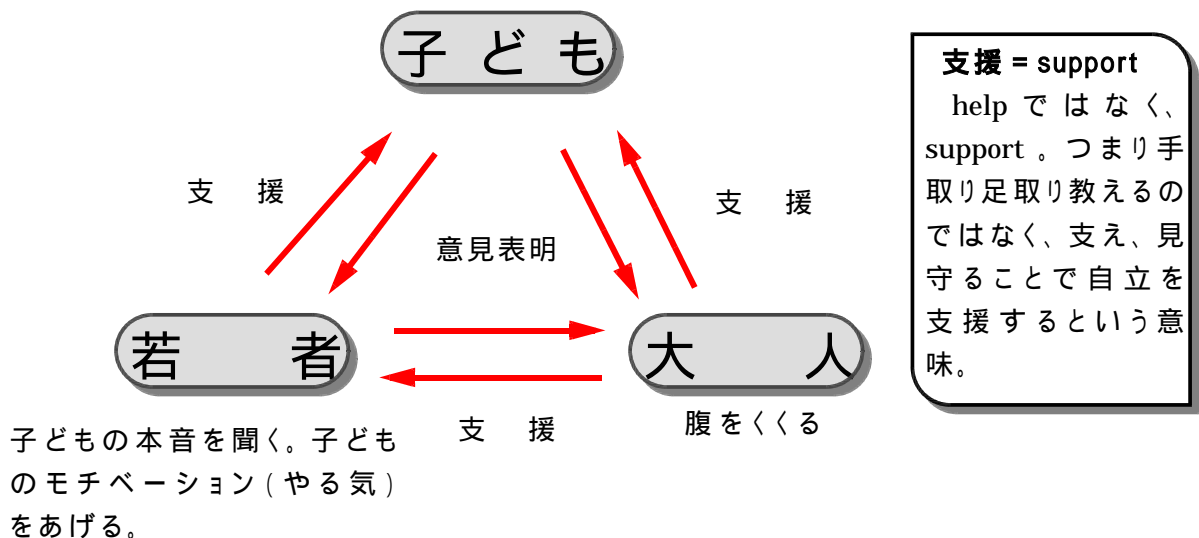
子どもは、心の中で自然に声を発しています。子どもの行動に目を向けてみるとよいでしょう。例えば、その場にいるのですが、どうも元気がありません。ゲームにも参加しません。このような状況を見逃さないようにしたいと思います。何か原因があるはずですが、その場にいるということは、参加したいという気持ちはあるのです。例えば「出がけに親とけんかした」「そこにいる友達との関係がうまくいっていない」などであるかもしれません。そんなときには無理にゲームに参加させることはありません。様子を見て何かその子にできることを探してあげて、「ここにいてもいいんだ」という気持ちにさせることが大事です。そして何か役割を与えられればさらによいでしょう。

元気のない子どもがいる場合、大人は無理にゲームに参加させたり、励ましたりすることがあります。しかしどうして元気がないのか理由を聞かなくてもよいし、寄り添ってあげるだけでもよいのです。したくなれば自分から話をします。そんなとき大人よりも日常的につきあいがあり、人間関係ができている若者であれば子どもは話をすることがあります。最初からこのような対処ができる若者はまれですが、少なくとも大人よりも子どもの気持ちをわかってあげることができるはずですが。

こういった活動では、若者は子どもたちに複数で関わるべきです。子どもをリードしたり、盛り上げたりする役割とちょっと周囲とちがった行動をしている子どもをフォローする役割が必要です。また子どもに対する自分の行動や言動については、気がつかないことが多いのですが、お互いに第三者としてフィードバックすることも大切です。短時間でもふりかえりをして、次回に生かすことが大切です。若者は、子どもとの関わり方について、研修を受けることも必要ですが、子どもと関わるという体験を通じて、多くのことを学ぶことが最も大切です。の2に若者の育成プログラムを掲載していますが、参考にしてほしいと思います。

こうして子ども・若者・大人が協力することで、一緒に課題を解決することができれば、地域の人たちの一体感が生まれ、地域社会の再生につながります。

子ども・若者・大人の関わり方



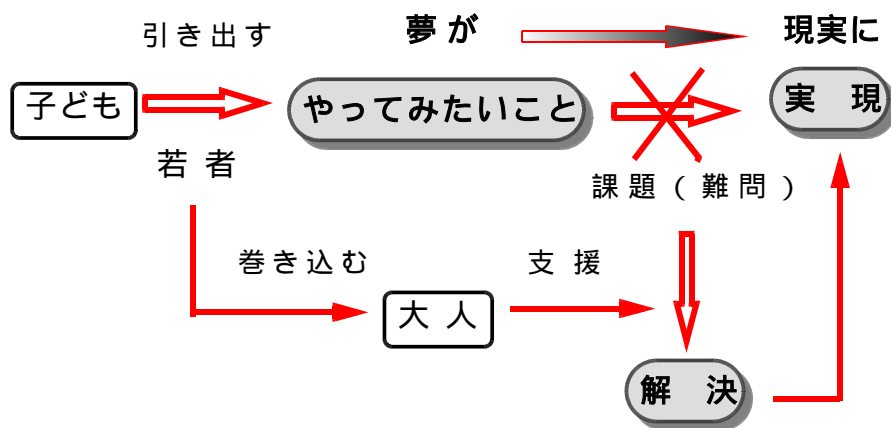
大人の役割

若者が子ども活動に参画するという事は有効なのですが、それでは大人は子ども活動にどのように関わればよいのでしょうか。子ども活動を進める上で、若者が子どもの声を聞きながら、子どもが望むものを実現していくことが大切です。しかし子どもの望むことを実現させるためには、課題がたくさん出てきます。子どもと解決策と一緒に考えても、子どもと若者だけでは困難なこともあります。例えば「成人の人間が責任を負うことが必要な場合」

「自治会などに協力を求める際の橋渡し役が必要な場合」「会場を借用する際に成人が申し込まなければならない場合」「荷物を運ぶ際に車が必要な場合」などが考えられます。そんなときには大人の力が必要となります。

大人は自分が望む方向に子ども・若者を向かせようとしがちです。またあれこれと口を挟むこともします。それでは子ども・若者の支援にはなりません。子ども・若者の言うことを素直に聞く耳を持つことが大切です。「面倒だ」「子どもの言うことはいちいち聞いてられない」「どうせ無理だろう」という否定的な考え方をしてほしくありません。また逆に「何でもできるから、どんどん意見を言ってみなさい」と言っておいて、実際に出てきた意見に対して、責任をとらないような関わり方は、子ども・若者を裏切ることになります。それこそ子ども・若者は大人に何も期待しなくなるし、意見も言わなくなるでしょう。やはり最初の段階で、大人にできることはこの範囲だということを明示し、それに対して大人は「腹をくくる」覚悟が必要になります。大人の意識改革を望みたいと思います。

子ども活動における若者・大人の役割



子どもが変わる～若者の支援が子どもにもたらすもの

子どもは親や学校の先生から普段いろいろなことを教わりながら生活しています。確かに教わることは大切であり、生きていく上でたくさんのことを学ばなければなりません。しかし大人の言うことを聞いているだけの繰り返しでは、それに馴らされてしまった子どもたちは、自分で考え課題を解決したり、困難を乗り越えていくことをしなくなってしまいます。また大人の言うことを聞いていればよいという考えの大人が多いと、子どもは初めはいろいろ考え・意見を出しても、どうせ聞いてくれないのだからと自分の意見を言わなくなってしまいます。それでは、子どもの成長にはつながりません。

若者が子どもの意見を聞き、一緒に考え、ときには大人の協力を得て、子どもが望むことを実現することができれば、子どもたちがどのように感じるでしょう。「へー意見を言ってもいいんだ」「へー僕たちの意見を聞いてくれるんだ」という実感につながり、自分でものを考え、工夫して解決するということができるようになっていきます。まさに「生きる力」「共感する心」が身につくことにつながります。そして何よりも民主主義体験をして、それを学んだこととなります。

地域社会でのこのような活動に参加することで、子どもたちは成功も失敗も体験するでしょう。成長していく過程で、実は失敗体験の方が重要なのです。次にうまくいくようにするためにはどうすればよいのかを、考えることにつながります。したがって大人は子どもの失敗を許すことを学んでいただきたいと思います。

地域社会での多様な体験を繰り返すことは、いわゆる「体験学習」となります。ソーシャルスキル(人との関わり方)を学んでいきます。さらに自分と社会とのつながりを実感することができます。社会性が身につくだけでなく、上手に断る能力、選択する力や自己決定能力を身につけていくことで、いろいろな誘惑に安易には乗らなくなります。またその場の雰囲気だけを判断材料にすることもなくなります。

これらはやがて子どもたちが社会的に自立していくために不可欠な知恵であり、スキル(技能)であり、自分で考え行動するために必要なものとなります。

活動に参画することが、若者にもたらずもの

若者が地域活動に参画することは、地域社会における一定の役割を担うこととなります。そこで地域の大人や子どもと関わり、社会との接点を持つことは、若者自身の成長につながり、社会的に自立するきっかけとなります。また地域社会自体を理解し、やがて大人になったときに、地域社会における大人としての役割を担うための動機付けともなります。そして何よりも若者自身が、生活していく上で自信をつけていくこととなります。

地域社会における人材の循環システムづくり

ここまで述べてきたことをまとめてみますと、地域で若者が子どもの参画する活動を立ち上げ大人を巻き込みながら子どもを支援することで活動を進めていけば、地域に暮らしている人たちが共通の話題を持ち関わり合いを持つようになり、本来の意味の地域社会として再生していくこととなります。

この冊子を読めば若者がすぐに活動を始めるということではありません。自ら行動できる意識の高い若者がそれほどたくさんいるわけではありません。やはり大人が何らかの形で若者に示唆したり、育てていかなければなりません。青少年支援・指導者と呼ばれる青少年活動に関わる大人の人たちは、実際に子どもと関わっていくのは若者であり、大人の役割は側面から支援することだと考えていただきたいのです。支援する側の大人の意識ですが、地域行事に参加したいと考えている人は潜在的に存在していると考えられます。ただきっかけがないだけではいかと思われれます。そのきっかけ作りを若者を通して、見つけてほしいところです。

大人が意識改革をして、子ども・若者を支援する形で関わっていけば、時間はかかっても子ども・若者は成長をしていきます。活動が楽しく魅力あるものであれば、子どもはやがて中高生になり、かつて自分たちが体験したことを次の世代(子ども)に体験させてほしいと思います。「調査結果のまとめ」(P.65)のジュニアリーダーズクラブへの参加動機を見ますと、実際にキャンプなどの楽しい経験をした小学生が、中学生になると、先輩に憧れて自分も子どもたちの面倒を見ることができるリーダーになりたいと、ジュニアリーダーになったというものがあります。それでは若者はどうか。若者は活動を実際に体験することで自信をつけていきます。そして年齢が上がっていくに連れて、地域社会のあり方を理解していきます。そして地域社会における大人の役割とはどんなものかを考え、自分もそのようにありたいと思ってもらえるのが望ましいわけです。また自分が育った地域に大人になっても住みたいと思えるようになればしめたものです。そのためには大人が地域社会におけるモデルにならなければなりません。

実際には日本の産業構造を考えると自分の育った地域で職業に就くことは難しい状況です。地域に住んでいても通勤時間が長く、家には寝に帰ってくるだけ、あるいは転勤により県外に異動してしまうこともあります。ここでそのことを論じて、簡単には解決できない問題です。しかし、少なくとも地域社会の大人が子ども・若者と関わり、活動の中で頼もしいと見込んだ若者を地域で引き続き働くことができるように何とか考えてほしいと思います。若者をそのときだけの使い捨てにしてほしくありません。いずれにしても地域において子どもから若者へ、若者から大人へ、そして家庭を持ち子どもを育てるといった循環ができていけば、真の地域社会として機能し続けることとなります。地域社会における人材の循環システムとでも言えるものです。

「地域が元気になるための活動に参加したいと思うか」という質問に対して、参加したい(積極的に参加したい+機会があれば参加したい)が63.9%であり、参加したくない(あまり参加したくない+参加したくない)が21.3%で、住民の参加意識がある程度高いと言える。(『地域再生に関する特別世論調査』平成17年6月内閣府大臣官房政府広報室の世論調査、対象:全国20歳以上)

